

有機技術通信

トピックス

- 年頭にかんがえたこと
- 「第2回有機農業技術総合研究大会」のご案内
- 「有機農業大学講座in信州大学&第3回研究会」を開催

www.ofrc.net

特定非営利活動法人
有機農業技術会議 事務局
発行責任者：藤田 正雄

年頭にかんがえたこと

有機農業第II世紀の幕が開けて2年目の正月を迎えることになった。いったい何が変わったのだろうか？有機農業推進法ができたからと言って、浮かればなしの1年ではなかったか。これからが正念場だというのに、何一つ具体的な提言が出てこないのはどういうわけだ。と、正月早々患痂が出てきたと思う間に、足の親指の付け根に激痛が走った。はじめての痛風の発作だった。痛みのおかげで正月はのたうちまわり、休み明けに病院へ駆け込んで松葉杖のお世話になった。

痛風の診断が下るまで、血液検査は必須なのか、少量の採血をされた。いやはやその早いこと。1時間もしないうちに身体の状態がたちどころに分かる二十数項目の検査結果が出てくるのである。激痛もさることながら、診断の迅速さに驚いた。これは作物や土壌の診断に使えないのだろうか？そう考えたのである。

自宅に帰るや、痛い足を引きずりながら、本棚から参

西村 和雄（有機農業技術会議代表）

考書を抜き出し、チェックしてみた。土壌養分分析法、植物の分析方法などである。それを再読してみても暗澹たる気分になった。なぜか？

分析方法と、その手順が煩雑きわまりなく、しかも旧態依然としている。なんとかならないものか。そうおもいつつ、簡易土壌分析のキットを使った経験も思い出してみた。やはり、分析手順は同じである。その意味では50年近く、何も変わっていないのである。それが農学だったのだ。昨年まで農学に何らかのかかわりを持ちながら、ついぞ浮かばなかった考えである。やはり中にいるだけでは駄目だ。井戸の中の蛙どころか、農学者というのは井戸の中の微生物なのかもしれない。それほど遅れていると実感した。

しかも、50年以上前の分析方法を自慢げに土壌診断や作物診断に使っていて平気なのももっと面白い。それを、一般の人には決して理解できない農学の専門用語

第2回有機農業技術総合研究大会

今回は北海道での開催を意義づけるため、有機農業が大面積でも可能なかどうかを中心課題として、より具体的な討議をします。大面積で有機農業に挑んできた農家の努力をもとに、様々な視点で「大規模有機農業の可能性」を探っていきたくと願っています。

シンポジウムでは、稲作、野菜作、ダイズ作における大規模有機農業の成功事例および北海道立農業試験場からの技術開発の報告を受けて、今後の技術開発と規模を拡大するための諸条件を議論し、大規模有機農業の可能性を探ります。

さらに、稲作、畑作、畜産、堆肥・土づくりの4つの分科会に分かれて、座長等の話題提供をもとに、参加者と意見交換をします。

水稲分科会（座長：稲葉光國氏）では道立試験場、民間研究者および実施者の報告をもとに、除草技術の現状と課題、収量の安定性と肥培管理、技術開発の進め方、の3つのテーマについて意見を交換していきます。畑

日時 2008年3月21日（金）
場所 酪農学園大学
参加費 3000円（賛助会員は1000円引）

日程

12:00～ 受付
13:00～13:30 開会・来賓挨拶
13:30～13:50 基調講演「有機農業の技術確立と有機農業技術会議の役割」
14:00～16:15 シンポジウム「大規模有機農業実現の可能性を探る」
16:30～18:45 分科会「稲作、畑作、畜産、堆肥・土づくり」

同時開催 3月21日 酪農学園セミナー、農民管弦楽団演奏
3月22日 農を変えたい！全国集会在北海道
3月23日 全国有機農業生産者懇話会

詳細につきましてはウェブ
サイト www.ofrc.net
をご覧ください。

作分科会（同：小祝政明氏）では北海道における普遍的で再現性のある有機栽培技術の確立を目指して基本と応用について、畜産分科会（同：吉田和生氏・本田廣一氏）では国産飼料の自給の可能性について議論を深めます。堆肥・土づくり分科会（同：橋本力男氏）では「畑で美味しい水をつくる」と題して様々な側面から堆肥を利用した健康な土づくりを明らかにしていく予定です。

を駆使して？滔々と語るのだから、聞く方はたまったものではない。これは完全にズレている。

マイクロエレクトロニクスが格段の進歩を遂げたのだから、マイクロレーザーやLEDなどうまく使えば、血液検査と同様な診断が現場でたちどころにできないだろうか。いや、出来るはずだと思うのだが、できないように思わせられているのは、もしかして日本の農が片隅に追いやられて、どうでもいい存在だと思われるからではあるまいか。だから農学なんぞどうでもいいやと、国がみなしているとするれば、これこそが

一大事。

しかし、農学の一分野である農芸化学（ここに土壌や作物の分析の権威がたくさんいる）が大学の改革で名前を消してしまったなあ。むかし悪口言っていたっけ。農を無視して、バイテクばかりやっているから農芸化学じゃなくて芸化学ではないのかと。

気を取り直して、芸化学をやってみるか！マイクロエレクトロニクスが「芸」を磨いてくれそうな予感がする。

「有機農業大学講座in信州大学 & 第3回研究会」を開催

2007年11月23日～24日に、信州大学理学部（長野県松本市）で開催した「有機農業大学講座および研究会」（主催：有機農業技術会議、後援：農林水産省、長野県、松本市、長野県農業会議、信州大学、JA長野中央会）に、両日で182名が参加した。

開講式には、来賓として農林水産省農林水産技術会議事務局松本万里課長補佐、長野県農政部農業技術課萩原正明課長、長野県有機農業研究会小林峰一会長よりあいさつをいただいた。松本氏からは、国の有機農業推進法成立後の取り組み状況が紹介された。萩原氏からは環境にやさしい農業を取り組んできた長野県の現状と、県の推進計画の策定に向けて準備を進めていること、推進法にしたがって有機農業者とともに有機農業を推進していくことを紹介された。小林氏は、推進法を有機農業実施者の手で育てていきたいこと、多くの人が参加でき、資材に依存しないわが国の本物の農業としての有機農業を推進していきたいと述べられた。有機農業者や、長野県はじめ地方自治体の行政担当者、研究者も多数参加し、推進法後の行政の動きを多くの方に理解していただいた。

講座および研究会の詳細は当日の資料集『有機農業技術確立のためにII』（1冊1000円で頒布中）を参照されたい。次年度は有機農業の推進に積極的に取り組んでいる地方自治体を会場に開催する予定である。

なお、両日の日程は下記のとおりであった。



講演風景

有機農業大学講座

- ・キューバの有機農業（吉田太郎氏＝長野県農業大学校教授）
- ・堆肥の効果と施用量の概算（西尾道徳氏＝元筑波大学教授）
- ・有機農業の実践報告 小林文昭氏（長野県伊那市）
柴本 勤氏（長野県中野市）由井喜代子氏（長野県佐久市）
- ・水田生物の多様性を育む有機稲作（稲葉光國氏＝民間稲作研究所）
- ・生態学からみた有機農業（藤山静雄氏＝信州大学教授）
- ・懇親会

第3回研究会（公開セミナー）

「有機農業の堆肥・土づくりを考える」

- ・有機農業の堆肥・土づくり（橋本力男氏＝堆肥・育土研究所）
- ・地域有機物を活用した堆肥づくりの現状と課題
（尾島一史氏＝近畿中国四国農業研究センター）
- ・堆肥で土づくり（酒井信一氏＝信州大学名誉教授）
- ・総合討論

賛助会員募集のご案内

有機農業技術会議では、当会議の趣旨に賛同して下さる方を対象に賛助会員制度を設けております。会員の方々へは、電子メールによる機関誌や研究会などのご案内、研究会・研修会などへの割引参加、総合研究会への参加、ご意見・ご要望の反映などのサービスもあります。この機会に是非お申込みください。

お申し込みは技術会議事務局にご連絡ください。また当会議ウェブサイトwww.ofrc.netのホーム→入会案内からも用紙がダウンロードできます。皆様のご入会をお待ちしております。

有機農業技術会議事務局

〒390-1401

長野県東筑摩郡波田町5632

（財）自然農法国際研究
開発センター

農業試験場 内

FAX:0263-92-6808

E-mail: office@ofrc.net

Website: www.ofrc.net